

2 北海道由仁村の開拓に生涯をかけた石狩のミカワ男児

加藤平五郎 (1860~1925/新川)



1 1歳で本家に養子、謹直で計算能力に優れる

加藤平五郎は、万延元年（1860）碧海郡棚尾村（現 碧南市志貴町）加藤平兵衛の五男に生まれた。1歳のとき大浜村浜尾（現 碧南市鶴見町）にある本家、加藤磯治郎の嗣子として移籍した。

慶応3年（1867）7歳のとき、近くにあった精界寺（現 碧南市住吉町）の佐々木恵遠に初学を習い、師が若くして亡くなると、鶴ヶ崎（現 碧南市浅間町）西光寺の清沢最天の塾に通い、和漢の書を学んだ。14歳のときには近隣の子に計算の初歩を教えるほどに進歩していた。

明治13年（1880）、20歳になると大浜村役場に勤めた。謹直な性格で計算能力に優れ、名古屋で行われた珠算大会でも優勝し、町長の信頼もことのほかあつかった。

2 豪商岡本八右衛門の番頭に、米津や安城の開墾に成功

当時、村会議員として役場に出入りしていた鶴ヶ崎の貿易商、岡本八右衛門は、平五郎の優秀さに注目していたが、明治16年（1883）、北大浜が分村独立したのを機に、直ちに平五郎を番頭に迎えた。岡本の店（「カネ八」）は郡内トップの豪商だったが、明治村の所有地が岡本兵松（岡本八右衛門の同族）の明治用水開削により開墾の見通しができたので、明治20年（1887）、和泉村（現 安城市和泉町）に事務所を開いた。岡本は、平五郎を支配人、篤農家のモデルとなる板倉源太郎を監督に命じ、米津村や安城ヶ原の原野を開墾した。4年後、第一岡本農場 34町歩の開墾に成功した。

3 開拓農業をもくろみ、北海道へ

第一農場開墾で、開拓農業技術を体得した平五郎は、「カネ八」の貿易先として、情報の蓄積のある北海道の開拓を図った。明治27年（1894）、34歳のとき現地調査のため単身北海道へ渡った。そして、開拓適地を定めて一旦帰郷した。

翌年妻を携え開拓民19名と共に新川港を出帆した。上野から青森までは汽車で、青森から再び船に乗り換えて北海道の新天地を目指した。

4 三川^{みかわ}駐車場の開設に尽力

最初は寒さの害で、作物の収穫ができなかった。明治30年（1897）に日常生活の便宜をはかるために三川（三河にちなんでつけた名）停車場（北海道炭礦鉄道・現 JR 室蘭本線）の開設に努力した。由仁村が大きく飛躍するステップの契機を作った。

この誘致に対する平五郎の熱意は、相当なものであった。監督官庁のある札幌へ連日30日間通って陳情を続けたのだ。その結果、条件付きながら誘致に成功した。その背景には、平五郎の開拓に邁進する情熱と、一貫した誠実さが官庁側に好意をもたれたからでもある。

駐車場の開設が、農産品の輸送の効率化を果たしたことは当然だが、そのために人々の往来が活性化し、宿屋・商人の開業する者が増え、現在の中心街へと成長し

ていった。

5 精神面の安定を図り、人づくりにも力を注ぐ

精神面での安定に心を配り、私費で神社を祀り、寺院を建て、墓地を設け、人々に墳墓の地としての意識を植え付けた。また、随時説教師を招いて法話を聴かせ宗教心の涵養を養成した。翌明治 31 年（1898）には、三川簡易教育所を開いて教師を招き、農民子弟の教育を重視し、適宜学用品を供与した。貧困者の子弟には、弁当さえ与えて出席を励ました。

また、住民のために明治 32 年（1899）に三川仏教説教所を開いた。

6 生活の向上と基盤整備にも力を注ぐ

明治 31 年に、家屋 14 棟が流出するという大水害を受けた。その後も干害・冷害・いなご大発生などに苦しんだ。だが、平五郎はそれらの苦難に負けず、排水路を開削し、橋をかけ、ため池をつくるなどの開拓を行い、農地の生産性の向上を図った。

明治 40 年（1907）には、公共性を重視して郵便局も開設した。治安の維持にも気を配り、巡査駐在所を誘致したりした。

更に生活面での農民の利便を配慮し、事務所に味噌、醤油、砂糖、木綿、紙類などの日用品を置き、不便な買い物の手間を省かせ、しかも困窮者には代金を無期限で貸与した。

こうして 1 千町歩という広大な原野の開拓成功は、他の資本主義地主と異なり、常に農民と共に自ら畝を振るい、苦楽を共にしたことにあった。

7 皇太子殿下の行啓で御下問をうける

大正 8 年（1919）11 月、皇太子裕仁親王殿下（後の昭和天皇）の北海道行啓の際、由仁村開拓の平五郎は、札幌の豊平館に農民の石狩代表として召された。殿下より御下問をうけ、北海道における開拓事情を直々に答えた。下賜された御菓子に、臥薪嘗胆の歳月の労苦が報われた思いが込み上げ、感涙の涙を流したと言われる。

8 晩年の顕彰の数々

大正 10 年（1921）に大日本農会より農事改良の功により表彰された。大正 12 年（1923）には、由仁村農会の会長に選ばれた。大正 14 年（1925）4 月に勲八等瑞宝章を授与されたが、同年 7 月に 65 歳の生涯を閉じた。

昭和 5 年（1930）、由仁町の人々は平五郎の功績をたたえて三川駅前に胸像を建てた。

9 由仁町と碧南市は、青年友好都市に

平五郎の開拓が縁で、昭和 63 年（1988）4 月 5 日に由仁町と碧南市は、青年友好都市として提携調印した。平五郎が見知らぬ土地に種をまいた志が、約 1 世紀の時を過ぎ、青年友好都市という新しい芽が息吹き出したことになる。

その後 20 数年を経た現在に至るまで交流が続けられ、「ミカワ」という互いの地に美しい花を咲かせている。

◆もっと知りたいなら

- ・『石狩の三河男児』（昭 62 加藤良平）
- ・『加藤平五郎』（平 11 季刊誌『みどり』加藤良平）